

物事はさまざまな方向から見ることができ、その分多様な解釈があります。戦争によって生み出される犠牲が大きい一方で、戦争によって生み出される新たな科学技術によって、国家が発展し、新たな国際秩序が生み出されることは、人類の進化や発展にとっては、ある意味で良い点として捉えることができるかもしれません。核兵器もまた戦時に開発されたものであり、核分裂や核融合といった技術を平和的に利用すれば、発電や土木工事、資源の採掘など、私たちの社会の発展に貢献する力となります。

しかし、この技術が兵器として使用されれば、文字通り全てが破壊されます。今まで人々が住んでいた土地、住居、そこで暮らす人々の生活や文化、そして最愛の人や自分の子ども、もちろん自らの命がすべて失われます。

仮に自分の一番大切な人、愛する人が核兵器の犠牲になったとしましょう。顔の皮膚は剥け、赤か黒かもわからない色の血を吐き出し、ほんの僅かな涙を流しながらあなたに「痛い、痛い、助けて」と懇願してきます。もしくは、すでに黒焦げになり、誰であるかわからないような状態かもしれません。また、命が助かっても、後遺症に長期的に悩まされ、「他者を助けられず自分だけが生き残ってしまった」という罪の意識や、被爆者に対する差別や偏見も多く残ります。核兵器とはそのような惨い犠牲を伴う、他の兵器と比較にならないほどの非人道性を持ち合わせる兵器なのです。

しかし、核兵器がなくなれば、世界は平和になるのか。今世界にある核弾頭の総数は推定1万2120発とされています。冷戦期に存在していた核弾頭数は、約7万発近くにも上ります。現在の核弾頭数はこれと比較するとかなり少なくなり、したがって、世の中は核廃絶に向かっているとも考えられます。でも、核弾頭がいまだに存在しているという事実が変わりはありません。そして現代の核兵器は、広島・長崎に投下された原子爆弾に比べて破壊力も命中精度も格段に上がっています。なぜ核兵器はなくなるのでしょうか。

その最大の理由は、核抑止の概念が存在することです。核抑止は、第二次世界大戦後、国家安全保障の中心的な概念となりました。他方で、これと並行して、国際社会では核兵器の非人道性への懸念から、核兵器の数を減らし、最終的に核兵器を完全に撤廃することを目指す核軍縮が重要視され始めました。

しかし、核軍縮に関連する多くの条約が存在するのにも関わらず、その実現には限界があると言わざるを得ません。核保有国が核兵器を手放さない限り、真の核軍縮は困難です。また、核の傘に依存する日本のような国々は、核抑止の重要性を軽視することは、安全保障上、できません。核軍縮と核抑止は一見対立する考えのように見えますが、どちらも最終的には戦争を回避し平和を実現することを目指しています。これらの概念が交わる点と妥協点を探すことは、現代の安全保障において重要な点です。核抑止を維持しつつ核軍縮を進めるためには、国家間、特に核保有国と非核兵器国の間の信頼関係と相互利益の認識が不可欠です。そのためには国際的な協力が求められます。

日本は、唯一の戦争被爆国でありながらアメリカの核の傘に入っているという特殊な立ち位置にあり、その政策は核軍縮の分野において重要になります。2010 年から行われている「軍縮・核不拡散イニシアチブ」や、2017 年から 2020 年にかけて行われた「核軍縮の実質的な進展のための賢人会議」など、橋渡しとして核軍縮派と核抑止派、核兵器国と非核兵器国といった対立する国や組織をつなげる政策を今後も絶えず行う必要があります。核兵器禁止条約にも、ただ反対の姿勢を示して終わるのではなく、まずはオブザーバーとして参加すべきです。核兵器を実際に使用され被害を受けた日本にしか分からないことや、それでも核の傘に入らざるを得ない安全保障環境を説明することがなぜ必要となるのか、日本にしか訴えられない事情への理解を促し、そのうえで「核兵器のない世界を目指す」という核軍縮政策への説得力を持たせることが重要になります。

ただ、これだけでは足りません。核兵器の価値自体を下げていく必要があります。たとえば、非核兵器国が核保有国よりも経済的優位に立つことで、核の価値を低下させることも 1 つのアプローチであると考えます。核兵器が安全保障政策に与える影響はもちろん否定できませんが、その価値をどう評価するかは時代とともに変わります。冷戦終結後、核兵器の政治的価値は変化しつつあり、新しい安全保障体制を構築することが求められます。これによって、核兵器の価値を下げ、可能であれば時代や情勢に左右されないよう核兵器の価値の固定を実現できれば、なお良いでしょう。

核軍縮と核抑止は対立する概念ではなく、共通の目的を持っています。それは戦争を回避し、平和を実現することです。核のある平和か、核のない平和か、核兵器が存在する限り、核が使用されないとは言いきれません。核保有国は、表では核兵器の使用を否定しているものの、裏ではいつでも核兵器を使用する準備がととのっているのです。いまだに世界には、たくさんの命だけでなく、人々の絆も、心も、未来も簡単に奪う兵器が 1 万発以上存在しています。原爆投下によってもたらされた実情を聞くと、何度も目を背け、耳を塞ぎたくなります。しかし、過去に起こった出来事はもう変えられません。

核保有国及び、日本のリーダーに訴えます。

戦争を回避し、平和を実現するという共通の目的を各国が認識し、協力する必要があります。そして各国の協力のために、唯一の戦争被爆国として、日本が橋渡しとなり核兵器のない世界を目指すべきです。私たちは、核抑止による平和ではなく、核がない、人類の脅威がない平和を求めます。